

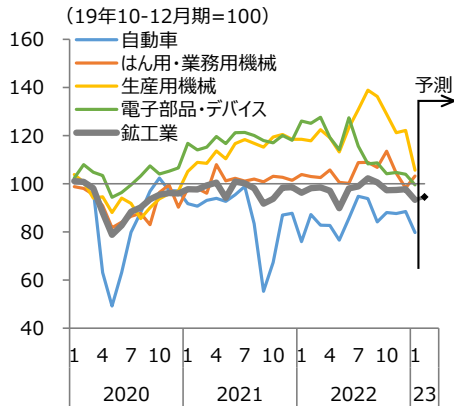
日本

鉱工業指数（2023年1月）

力強さを欠くも、自動車需要の底堅さから先行きは緩やかな回復へ

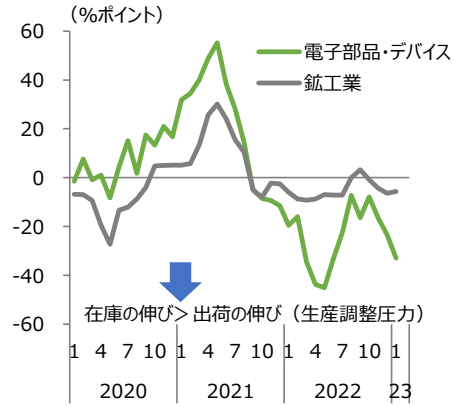
政策・経済センター
菊池紘平
03-6858-2717

1 鉱工業生産指数（業種別）



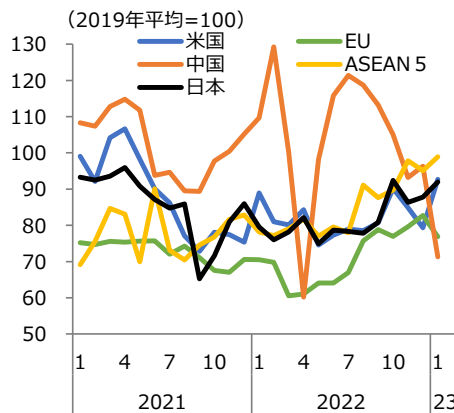
注：鉱工業のメーカーは23年2月の予測（製造工業生産予測指数を経済産業省が補正した値）。
出所：経済産業省「鉱工業指数」「製造工業生産予測指数」

2 出荷・在庫バランス（業種別）



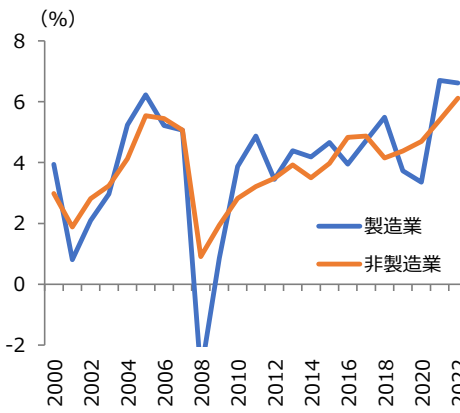
注：出荷指数前年比－在庫指数前年比。
出所：経済産業省「鉱工業指数」

3 国内外の自動車販売動向



注：季調値（日本、中国、ASEAN5は当社による季調値）。
出所：CEICより三菱総合研究所作成

4 設備投資増減率見通し（名目）



注：直近は2023年度から2025年度にかけての増減率見通し（年度平均）。
出所：内閣府「令和4年度 企業行動に関するアンケート調査」より三菱総合研究所作成

評価ポイント

今回の結果

- 23年1月の鉱工業生産指数（季調値）は、前月比▲4.6%と、3カ月ぶりに低下。業種別にみると、生産用機械は、半導体製造装置に対する需要の一服を受けて、大幅に低下。自動車工業では、車載半導体の供給制約が残っており、減産となった。他方、はん用・業務用機械については、国内の底堅い設備投資需要を背景に持ち直したものの、力強さには欠く状況だ（図表1）。
- 出荷・在庫バランスをみると、鉱工業全体では概ね横ばいとなった一方、電子部品・デバイスでは在庫の伸びと出荷の伸びの差が拡大した。中国の春節休暇時期のズレ（22年：2月上旬、23年：1月下旬）で出荷の前年比が下振れた影響も大きいとみられるが、先行きの生産調整への懸念も残る（図表2）。

基調判断と今後の流れ

- 生産は、自動車を中心に部材供給制約が残るなか、欧米の景気減速に伴う需要の減少もあり、コロナ危機前平均を下回る水準で推移している。
- 先行きは、緩慢ながらも回復基調に向かうとみる。この背景として、①国内外の自動車販売が総じて持ち直しつつあること（図表3）や、②国内の設備投資活動が堅調に推移すること（図表4）が挙げられる。
- 自動車販売については、振れが大きい中国を除けば、各国とも底堅い推移が続いている。日本では持ち直し傾向が持続しているほか、景気減速の影響が懸念されている米国・EUでも、現時点では大きく崩れている様子はみられない。部材供給が徐々に正常化すれば、自動車生産の回復が本格化し、電子部品・デバイスなどの生産調整を埋め合わせると期待される。
- 設備投資に関しては、内閣府が実施したアンケート調査で、今後3年間（23年～25年）における設備投資増減率の見通しが製造業・非製造業ともに年度平均+6%を上回った。この見通しには、DX関連のソフトウェア投資も含まれるが、企業の前向きな投資スタンスが維持されるなか、GXに向けたエネルギー効率の高い生産設備の導入なども進むとみられ、生産活動を下支えするだろう。